

大学図書館の学習支援

1

長澤多代

三重大学 情報教育・研究機構 情報ライブラリーセンター 研究開発室

nagasawa.tayo @mie-u.ac.jp

発表のアウトライン

1. 大学教育改革における大学図書館
2. 情報リテラシーと理論的基盤
3. 情報リテラシー教育のための教員と図書館員の連携を考える仕組み
4. ケーススタディからみる教員との連携
 - アーラム・カレッジ
 - ミシガン大学
 - タンペレ大学
 - 名古屋大学
5. まとめ



大学教育改革における大学図書館



1.1 予測不可能な時代

「学び」の質保証の再構築

学修者本位への教育への転換

高等教育のコストの可視化とあらゆる
セクターからの支援の拡充

教育・研究における多様性と柔軟性の確保

変化の時代

直面する課題の多くはこれまでに経験したことがない未知の課題
社会の課題の多様化・複雑化

多様な機関による多様な教育の提供

あらゆる世代が学ぶ「知識基盤」の確立

個人が自らの責任で課題を解決する

+

組織や社会の新しい仕組みを創り上げる必要性

課題の本質や背景を理解する上で欠けている知識を補うために、
情報を探しながら新たな解決策を生み出すことが必要に



1.2 2040年に求められる人材像

(松下, 2010/中央教育審議会, 2018・2023)

予測不可能な時代に、直面する課題を解決することができるのは
「知識」とそれを組み合わせて生み出す「新しい知」

基礎的で普遍的な知識・理解

+

汎用的技能

基本的な認知能力: 読み書き計算, 基本的な知識・スキルなど

高次の認知能力: 問題解決, 創造性, 意思決定, 学習の仕方の学習など

対人関係能力: コミュニケーション, チームワーク, リーダーシップなど

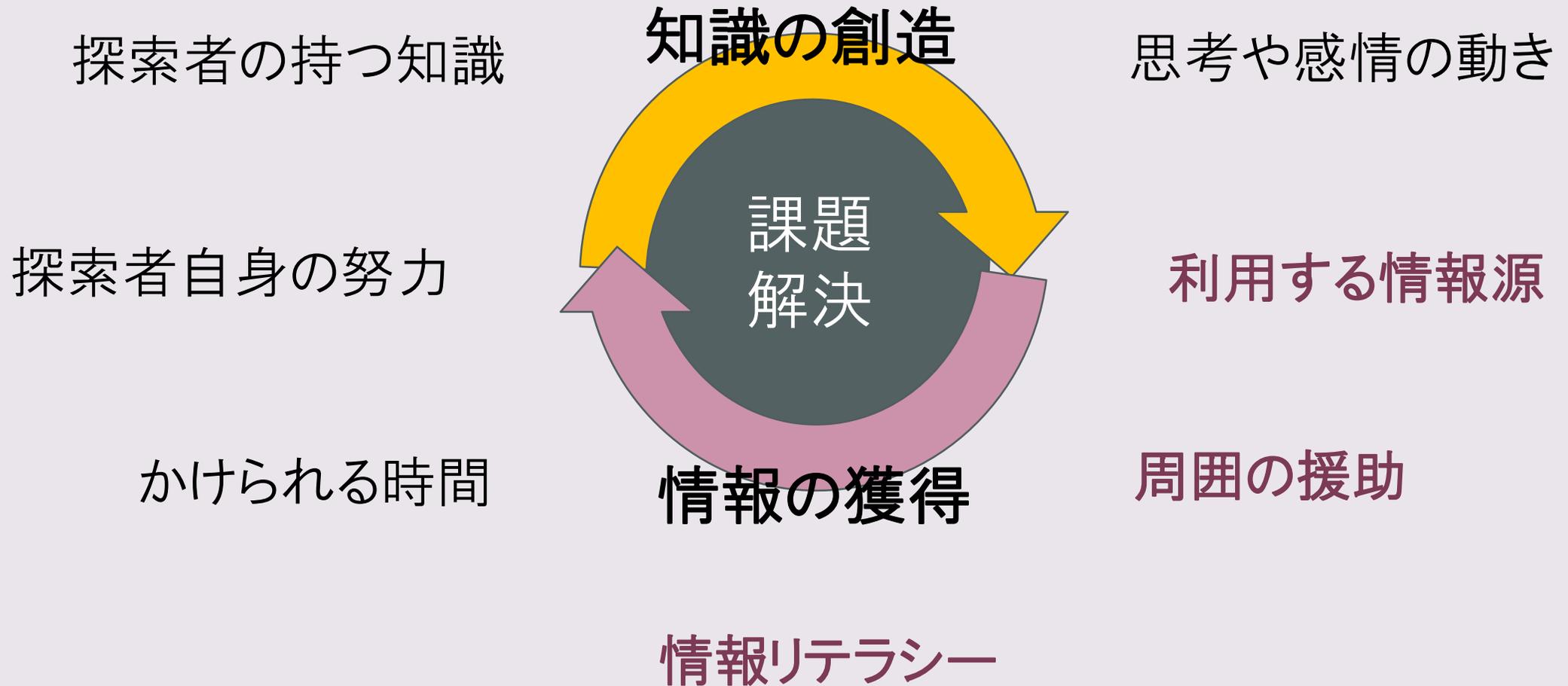
人格特性・態度: 自尊心, 責任感, 忍耐力など

その知識や技能の活用を善用でき,
ジレンマを克服することも含めたコミュニケーション能力を持ち,
自律的に責任ある行動をとれる人材

文理複眼的な思考

生涯にわたって学習をしながら、職業人として、市民として、
積極的に社会を支え、論理的思考力を持って社会を改善する人材

1.3 課題解決の仕組み



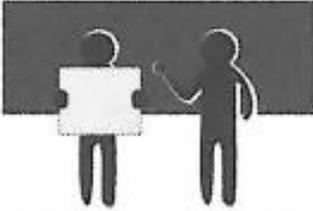
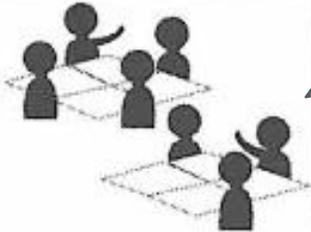
1.4 アクティブラーニングの一般的特徴

- 学生は、授業を聴く以上の関わりをしている
- 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれている
- 学生は高次の思考(分析, 総合, 評価)に関わっている
- 学生は活動(例: 読む, 議論する, 書く)に関与している
- 学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きが置かれている
- 認知プロセスの外化をともなう

「行為をすること + 行為について振り返ること」をとおして学ぶこと

高次の思考をするためには、それに見合う知識の獲得が必要になる

1.4 アクティブラーニング型授業の類型

授業の形態・類型		授業の特徴	
伝統的授業	講義型	教師から学生への一方向的な知識伝達型講義。教師指導。	
	講義中心型	話す・発表するといった活動はないが、コメントシートなどを用いた教師-学生の双方向性を組み込んだ講義中心の授業。教師主導。	
アクティブラーニング型授業	講義+AL型	どちらかと言えば教師主導であるが。講義だけでなく、学生の書く・話す・発表する等の活動も組み込んだ授業。	
	AL中心型	徹底的に学習パラダイムに基づいた学生主導の授業。	

習得重視型

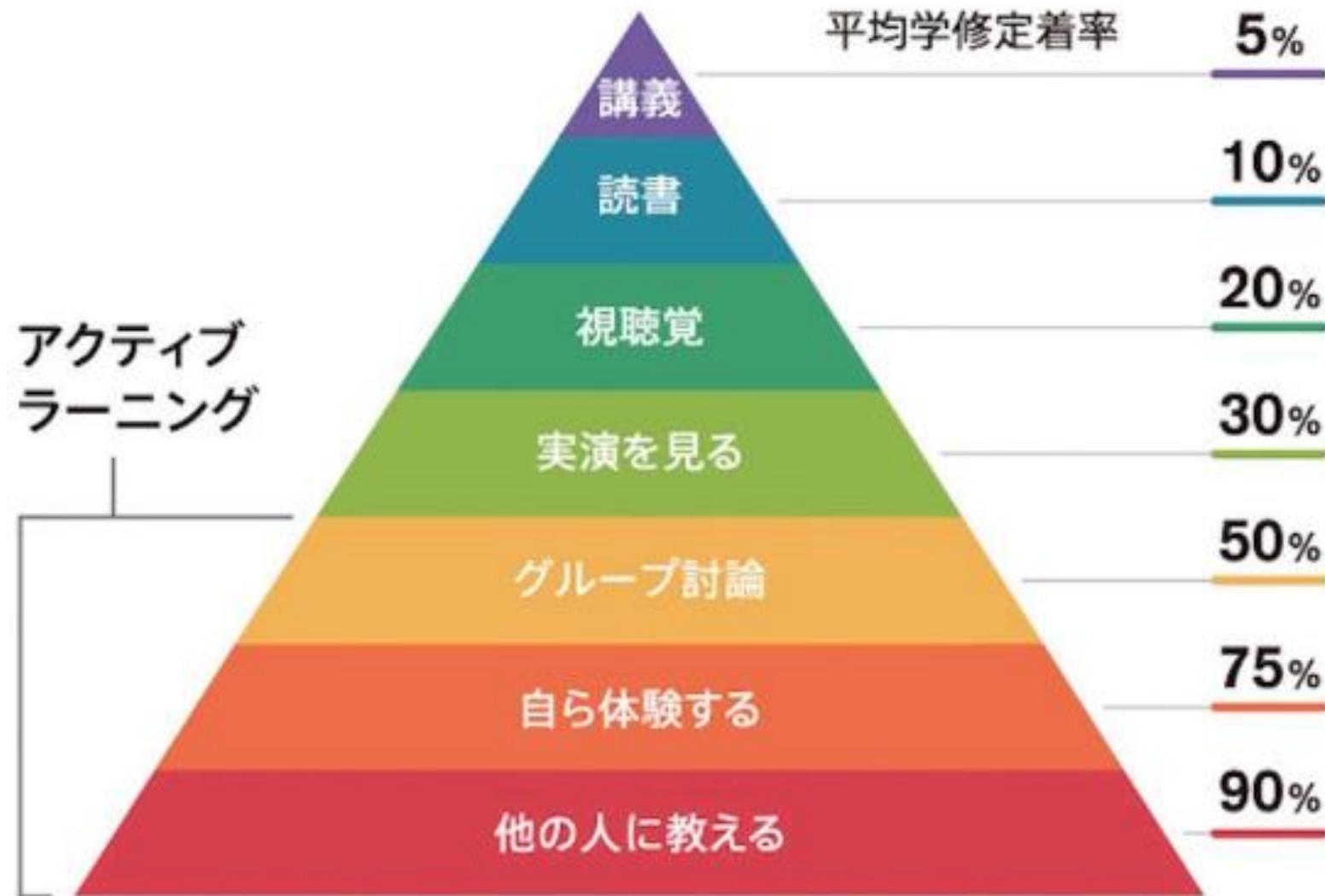
探究重視型

図 2-1 アクティブラーニング型授業の位置づけと類型

(溝上, 2016, p.36)

*ALは「アクティブラーニング」を指す。

ラーニングピラミッド



出典: The Learning Pyramid. アメリカ National Training Laboratories

1.5 大学生の学修時間：単位制度

1単位は①と②の合計で標準45時間の学修を要する学修内容
(大学設置基準 第21条)

- ① 教員が教室等で授業を行う時間
- ② 学生が事前・事後に授業外において準備学修・復習を行う時間

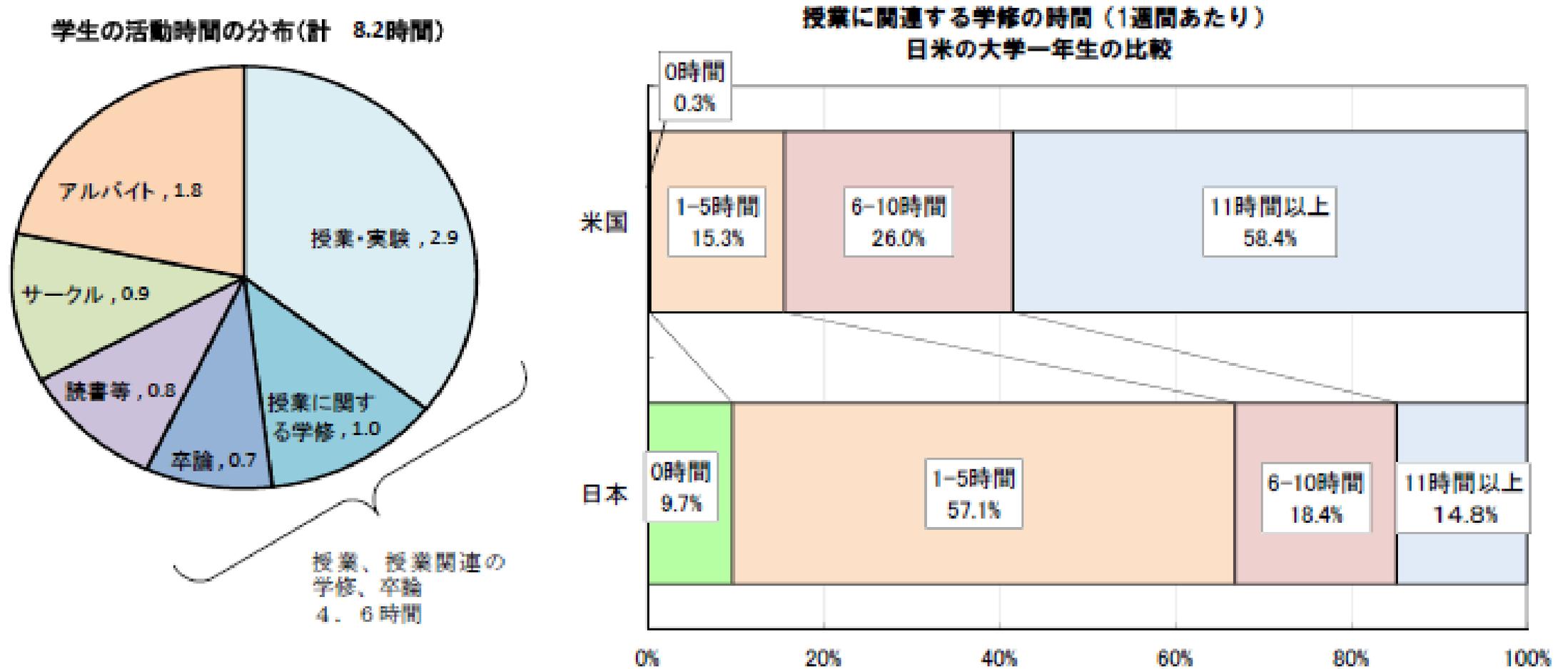
45時間＝1週間あたりの学修時間に相当

学修：単位制にもとづく正課教育（授業）の枠内に限定した学習

学習：学修の枠をはみ出る学習

（溝上，2015；土持，2012）

1.5 大学生の学修時間: 学生調査



東京大学 大学経営政策研究センター 『全国大学生調査』(2007, サンプル数44,905人)
(中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』2012)

その後の調査でも「授業に関連する学修の時間」にほとんど変化がない(金子, IDE, 2020)

1.5 アクティブラーニング型授業への転換

授業のための事前の準備 資料の下調べや読書, 思考, 学生同士のディスカッション, 他の専門家等とのコミュニケーション

授業の受講 教員による直接指導, 教員と学生, 学生同士の対話など

事後の展開 授業内容の確認や理解の深化のための探求等

「アクティブラーニングのベースとなる図書館の機能強化」(中央教育審議会, 2012)

事前の準備, 授業の受講, 事後の展開をとおして,
学生は【学習の仕方】と【学習習慣】を身につける

学生が学習の仕方と学習習慣を身につける過程に,
教員と図書館員が連携して図書館や情報の利用を組み入れることで,
学修成果の向上につながる情報リテラシーの向上が期待される

1.6 アクティブラーニングのベースとしての大学図書館の主な機能

学修成果の向上

入学時のオリエンテーション, 初年次学生対象の図書館ガイダンス
【科目開発】学科関連の情報利用指導, 卒業論文のための情報利用指導
【カリキュラム開発】情報リテラシー教育のカリキュラムへの統合
【組織開発】情報リテラシー関係のポリシーの策定

授業外の学修時間を確保するための学習支援環境の整備

ラーニングコモンズ, ファブラボ

FD(ファカルティ・ディベロップメント)等による教員の支援

新任教員オリエンテーション, 教育開発(FD)関係のワークショップ

SD(スタッフ・ディベロップメント)等による図書館職員の専門性の向上

高等教育+指導方法論についての知識とスキル
リーダーシップ+マーケティングについての知識とスキル

2

情報リテラシーと情報リテラシー教育

2.1 情報リテラシーの定義

- 高等教育の学びの場において必要と考えられる情報活用能力。課題を認識し、その解決のために必要な情報を探索し、入手し、得られた情報を分析・評価、整理・管理し、批判的に検討し、自らの知識を再構造化し、発信する能力。
(高等教育のための情報リテラシー基準(2015年版), 国立大学図書館協会)

理論的基盤: 情報探索プロセス・モデル, Big6スキルズ・モデル

- 情報を振り返ることで気づきを得たり, 情報がどのように生産され価値を持つようになるのかを理解したり, 新しい知識を創造するときや学習共同体に倫理をわきまえて参加するときに情報を活用したりするのを包含する一連の能力。
(高等教育のための情報リテラシーの枠組み, ACRL, 2015)

理論的基盤: メタリテラシー

情報リテラシー

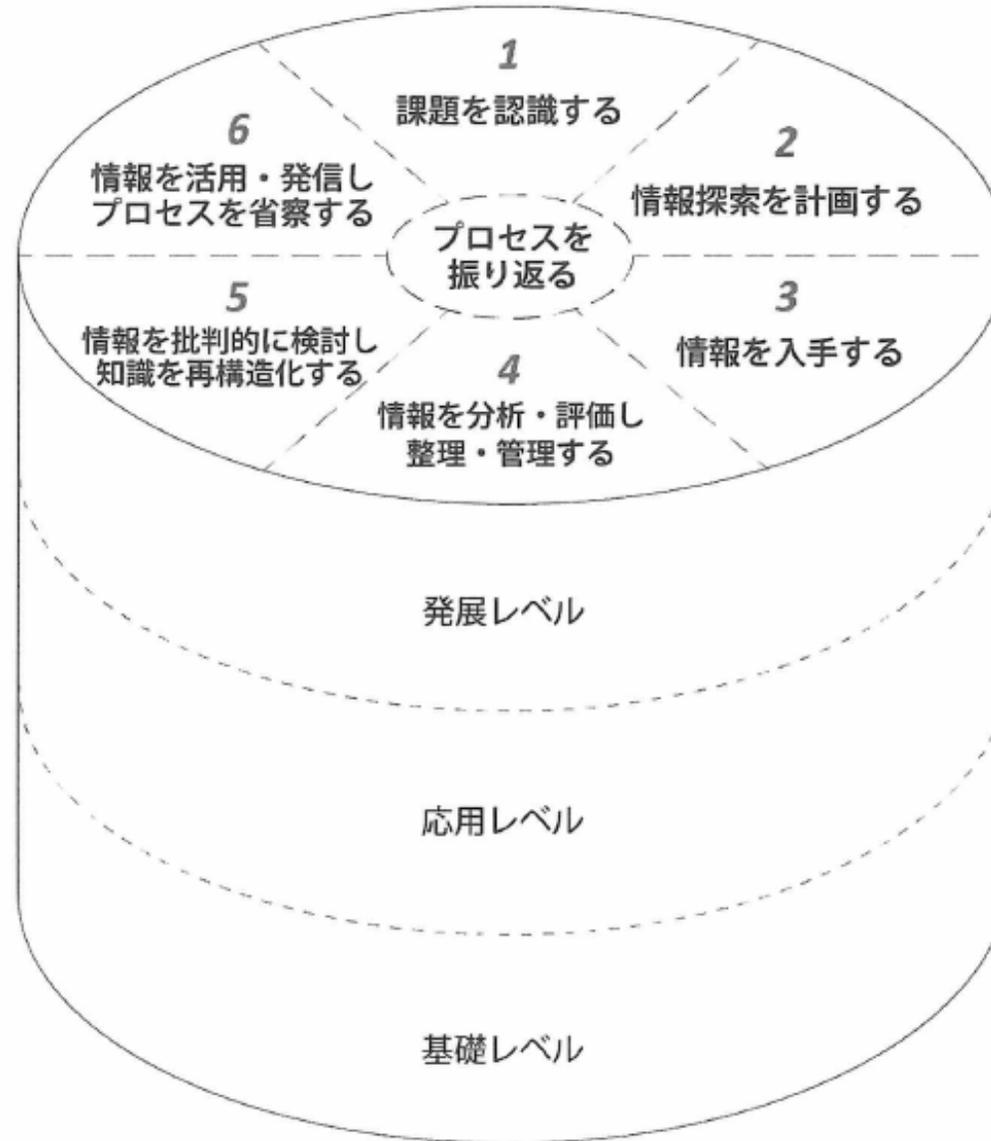
= 大学卒業時に身につけておくことが求められる学習成果

2.2 『高等教育のための情報リテラシー基準(2015年版)』*

6. 情報を活用・発信し、プロセスを省察する: 社会倫理に則り、合法的に情報を活用・発信し、情報の受け手と適切なコミュニケーションを行う。また、情報活用行動全体を省察する。

5. 情報を批判的に検討し、知識を再構造化する: 整理した情報を批判的に検討することで自らの知識を再構造化する。

4. 情報を分析・評価し、整理・管理する: 収集した情報を批判的に分析・評価し、情報を整理・管理する。



1. 課題を認識する: 課題を認識し、その解決に必要な情報の範囲を定める。

2. 情報探索を計画する: 課題を解決するために必要な情報を合法的・社会倫理的に適切に、かつ経済的・効率的に探索する計画を立てる。

3. 情報を入手する: 探索計画に基づき、課題を解決するために必要な情報を適切・効率的に入手する。

2.3 クールソのモデル：情報探索プロセス・モデル

高校生の情報探索行動の調査をもとに，感情，思考，行為の3つのレベルをモデル化

段階	第一段階 タスク 定義	第二段階 トピック 選択	第三段階 漠然とした 情報探し	第四段階 フォーカス 形成	第五段階 情報収集	第六段階 情報探し 終了	執筆開始
感情	不確実 不安	漠然とした 希望	恐怖・疑い フラスト レーション	明快	方向性 自信	解放感	満足 不満足
思考	漠然 -----> 明快 関心が高まる						
情報行動	関連情報を探す -----> 適合情報を集める 焦点が絞られる						

(三輪, 2003)

2.3 アイゼンバーグのモデル: Big6スキルズ・モデル

1) 課題を明確にする:

問題の定義, 情報ニーズの識別

2) 情報探索の手順を考える:

情報源の範囲や利用の順位を決定

3) 情報源の所在を確認し収集する:

情報源の所在の確認とアクセス

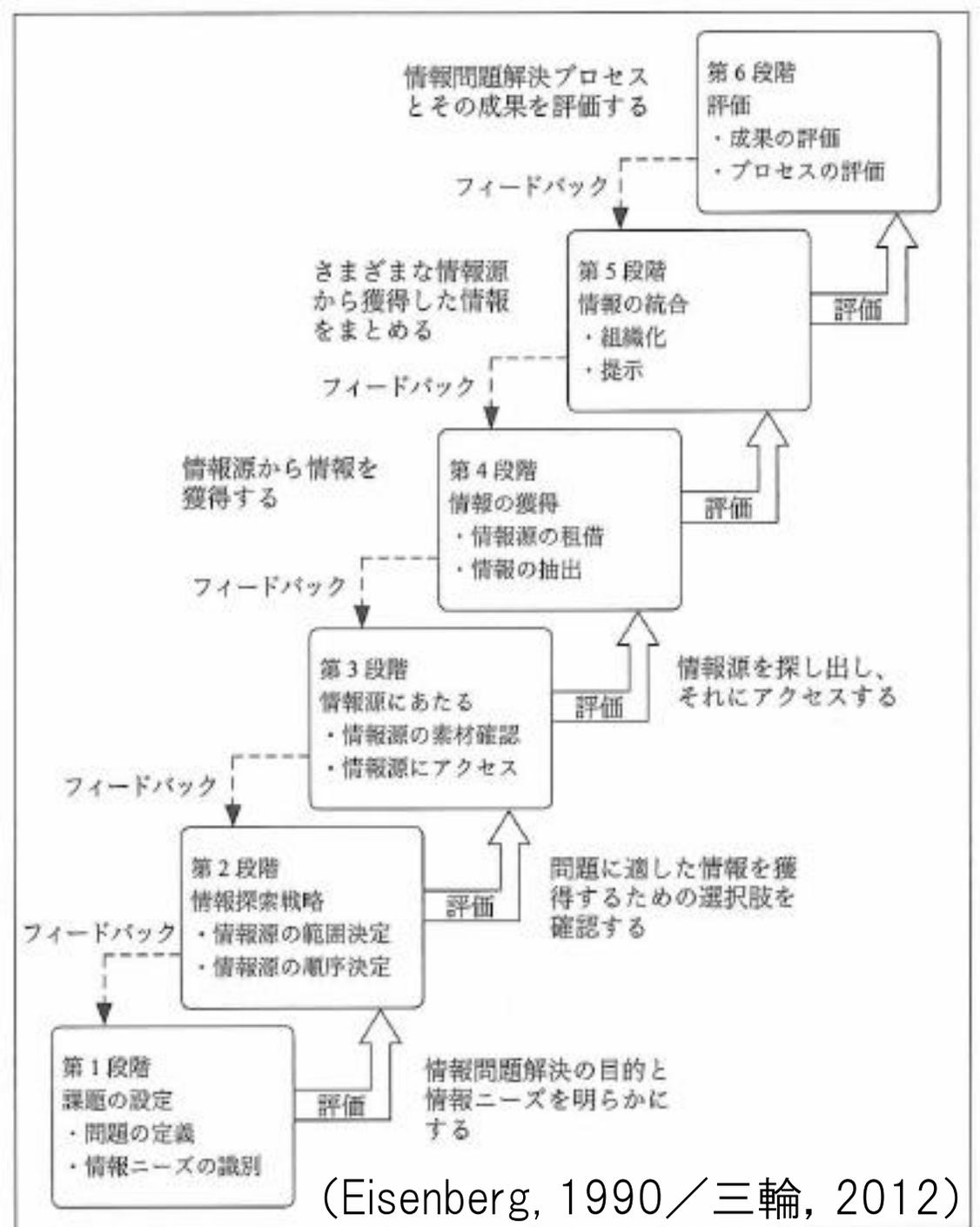
4) 情報を利用する:

情報源の咀嚼, 情報の抽出

5) 情報を統合・再構成する:

組織化, 提示

6) 評価する: 成果とプロセスの評価



2.4 高等教育のための情報リテラシーの枠組み

(Framework for Information Literacy for Higher Education) (ACRL, 2015)

6つの手がかり概念(threshold concepts)

それを理解することで特定の学問領域等における理解
やものの見方の獲得を可能とする概念や学習経験

オーソリティは作られ、状況にもとづいている Authority is constructed and contextual

プロセスとしての情報創生 Information creating as a process

情報は価値を有する Information has value

探究としての研究活動 Research as inquiry

会話としての学術活動 Scholarship as conversation

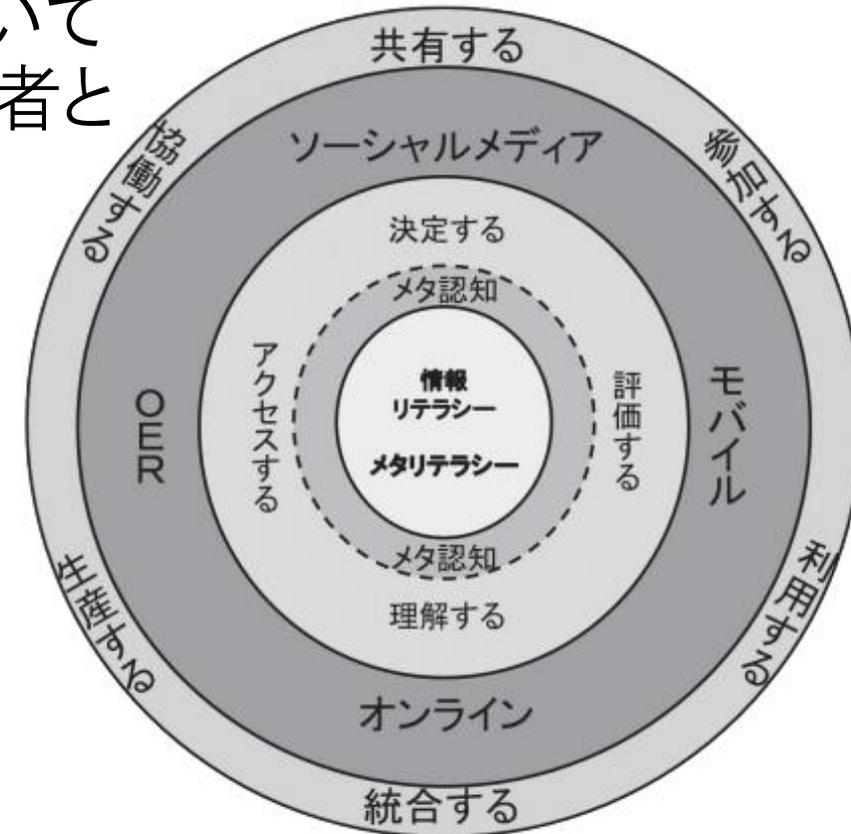
戦略的調査活動としての探索 Searching as strategic exploration

+ 45の知識実践(knowledge practice) + 38の心構え(dispositions)

(ACRL, 2015; 小田, 2016, 瀬戸口, 2019; 飯尾, 2019)

2.5 メタリテラシー(metaliteracy)

- デジタル環境下における様々なリテラシー概念(例として, 情報リテラシー, メディアリテラシー, デジタルリテラシー)を統合した枠組み
- メタ認知による振り返りを重視し, 参加型の環境において倫理上の問題なく責任をもって情報を生産する学習者となるための学習アプローチ
- 具体的な情報利用に必要なスキルや行動パターンではなく, 高次の認知機能(省察等)に焦点化
- メタリテラシーを有する学習者
= 情報の消費者 + 情報の創造者



2.6 3つの方針への情報リテラシーの位置づけ

3つの方針

- ①学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー, DP)
- ②教育課程編成・実施の方針 (カリキュラム・ポリシー, CP)
- ③入学者受け入れの方針 (アドミッション・ポリシー, AP)

カリキュラム・マップの枠組み			
授業科目名	ディプロマポリシー		
	DP1	DP2	DP3
X学概論	○		
X学特論	○		
X学基礎演習	○	○	
X学演習		○	○

①各学部や学科がどのような人材を育成するのか(DP)

②どのようなカリキュラム(授業科目群)がその人材を育成しようとするのか(CP)

③どのような学生を求めているのか(AP)

【名古屋大学のポリシー】

2.7 情報リテラシー教育：図書館利用教育ガイドライン

(日本図書館協会・図書館利用教育委員会, 2003)

領域	目標	方法
印象づけ	以下の事項を認識する： 図書館は生活・学習・研究上の基本的な資料・情報の収集・蓄積・提供機関 図書館は生涯学習を支援する開かれたサービス機関 など	ポスター, ちらし 大学のサイン 広報誌 オリエンテーション ほか
サービス案内	以下の事項を理解する： 施設・設備の配置 図書館員による専門的サービスの存在 行事の案内 など	図書館オリエンテーション 館内見学ツアー 館内のサイン パンフレット ほか
情報探索法指導	以下の事項を理解し習得する： 情報の特性, 情報検索の原理 レファレンス・サービスの利用法 資料の基本タイプと利用法(図書, 雑誌, 新聞, データベース) など	
情報整理法指導	以下の事項を理解し習得する： 情報内容の抽出と加工(要約, 引用など) 発想法(ブレインストーミング) 資料の分類とインデックスの作成法(キーワード, 見出し語の付与)など	レファレンスデスクでの支援 ワークショップ 授業やゼミでの指導 チュートリアル パスファインダー ほか
情報表現法指導	以下の事項を理解し習得する： 情報倫理(著作権, プライバシー, 公正利用等) レポートの作成法(構成, 書式, 引用規則等) プレゼンテーションの技法 など	

2.8 教学マネジメント指針(概要)

(中央教育審議会大学分科会, 2021)

学長のリーダーシップの下、学位プログラム毎に、以下のような教学マネジメントを確立することが求められる。

「大学全体」レベル

三つの方針

「卒業認定・学位授与の方針」(DP)、「教育課程編成・実施の方針」(CP)、「入学者受入れの方針」(AP)

教学マネジメントの確立に当たって最も重要なものであり、学修者本位の教育の質の向上を図るための出発点

IV

教学マネジメントを支える基盤
(FD・SD、教学IR)

I 「三つの方針」を通じた学修目標の具体化

- ✓ 学生の学修目標及び卒業生に最低限備わっている能力の保証として機能するよう、DPを具体的かつ明確に設定

II 授業科目・教育課程の編成・実施

- ✓ 明確な到達目標を有する個々の授業科目が学位プログラムを支える構造となるよう、体系的・組織的に教育課程を編成
- ✓ 授業科目の過不足、各授業科目の相互関係、履修順序や履修要件について検証が必要
- ✓ 密度の濃い主体的な学修を可能とする前提として、授業科目の精選・統合のみならず、同時に履修する授業科目数の絞り込みが求められる
- ✓ 学生・教員の共通理解の基盤や成績評価の基点として、シラバスには適切な項目を盛り込む必要

III 学修成果・教育成果の把握・可視化

- ✓ 一人一人の学生が自らの学修成果を自覚し、エビデンスと共に説明できるようにするとともに、DPの見直しを含む教育改善にもつなげてゆくため、複数の情報を組み合わせて多元的に学修成果・教育成果を把握・可視化
- ✓ 大学教育の質保証の根幹、学修成果・教育成果の把握・可視化の前提として成績評価の信頼性を確保
- ✓ DPに沿った学修者本位の教育を提供するために必要な望ましい教職員像を定義
- ✓ 対象者の役職・経験に応じた適切かつ最適なFD・SDを、教育改善活動としても位置付け、組織的かつ体系的に実施
- ✓ 教学マネジメントの基礎となる情報収集基盤である教学IRの学内理解や、必要な制度整備・人材育成を促進

V 情報公表

- ✓ 各大学が学修者本位の観点から教育を充実する上で、学修成果・教育成果を自発的・積極的に公表していくことが必要
- ✓ 地域社会や産業界、大学進学者といった社会からの評価を通じた大学教育の質の向上を図る上でも情報公表は重要
- ✓ 積極的な説明責任を果たすことで、社会からの信頼と支援を得るという好循環の形成が求められる

「学位プログラム」レベル

シラバス、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、ナンバリング、キャップ制、週複数回授業、アクティブ・ラーニング、主専攻・副専攻

「授業科目」レベル

ルーブリック、GPA、学修ポートフォリオ

項目の例は別途整理

I ~ Vの取組を、大学全体、学位プログラム、授業科目のそれぞれのレベルで実施しつつ、全体として整合性を確保。

学位プログラム共通の考え方や尺度(アセスメントプラン)に則り、大学教育の成果を点検・評価

積極的な説明責任

社会からの信頼と支援

2.9 情報リテラシー教育への転換

図書館利用教育から情報リテラシー教育への転換

図書館が関与すべき情報リテラシー教育

以前から実施してきた

図書館利用法, 文献探索法, データベース利用法を中核にした,
学習・研究情報の探索・評価・活用・提示の方法

図書館内部の事情にもとづくサービスから,
図書館が所属するコミュニティの要請に対応するサービスへの転換

3

情報リテラシー教育のための 教員と図書館員の連携を考える仕組み

3.1 教育開発のための教員と図書館員の連携に関する4つの視点

教育開発のための戦略的アプローチ

直接的なアプローチ

教員の情報行動・図書館観を理解する/
教員の教育活動・研究活動を支援する

教員と個人的な関係を築く

間接的なアプローチ

図書館の組織や人員を再編・強化する

連携に影響を与える図書館/大学/社会の条件

介在する条件

3.2 教育開発のための教員と図書館員の連携①

教育開発のための戦略的なアプローチ

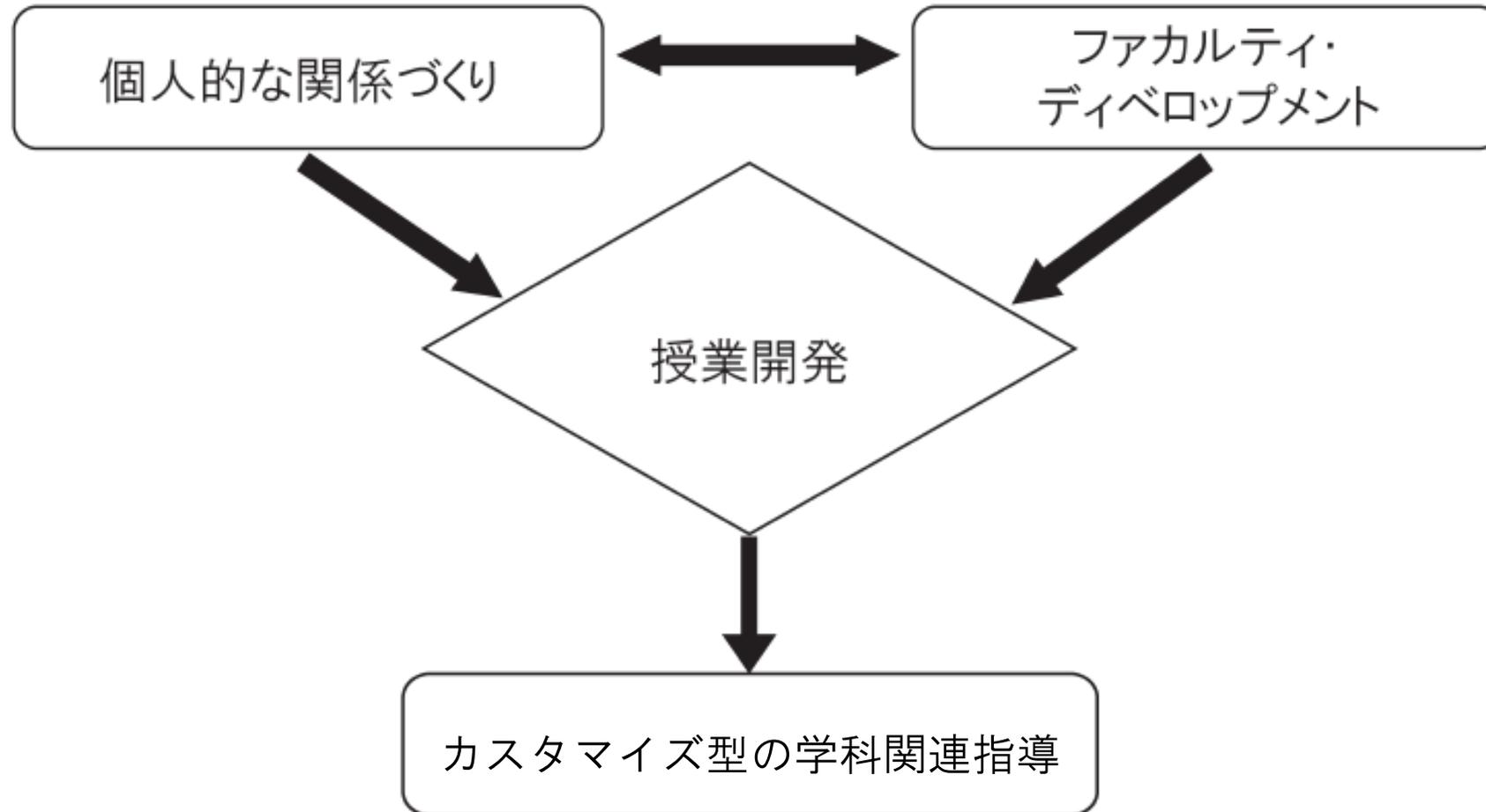
科目開発: 個々の教員による授業設計, 教材開発, 指導方法
カリキュラム開発: 教務委員等によるカリキュラムの設計
組織開発: 大学のポリシーの策定, 学習教育環境の整備

教員と図書館員の連携(を超えた多様な大学構成員の連携) (Wang, 2010)

共通理解を形成する	情報リテラシーをカリキュラムに統合する目的や重要性, その成果についての共通理解を形成する
専門知識を共有する	それぞれの専門知識を共有し, 専門分野の支援を提供する
敬意と忍耐を持って対話する	相互に尊重し忍耐を持ちながら同じ目標を達成するために, 交流し, 折り合いをつけ, やりとりをする
信頼と支援をもとに協力する	強固な信頼と支援をもとに, 合意した任務を果たすために一致協力する

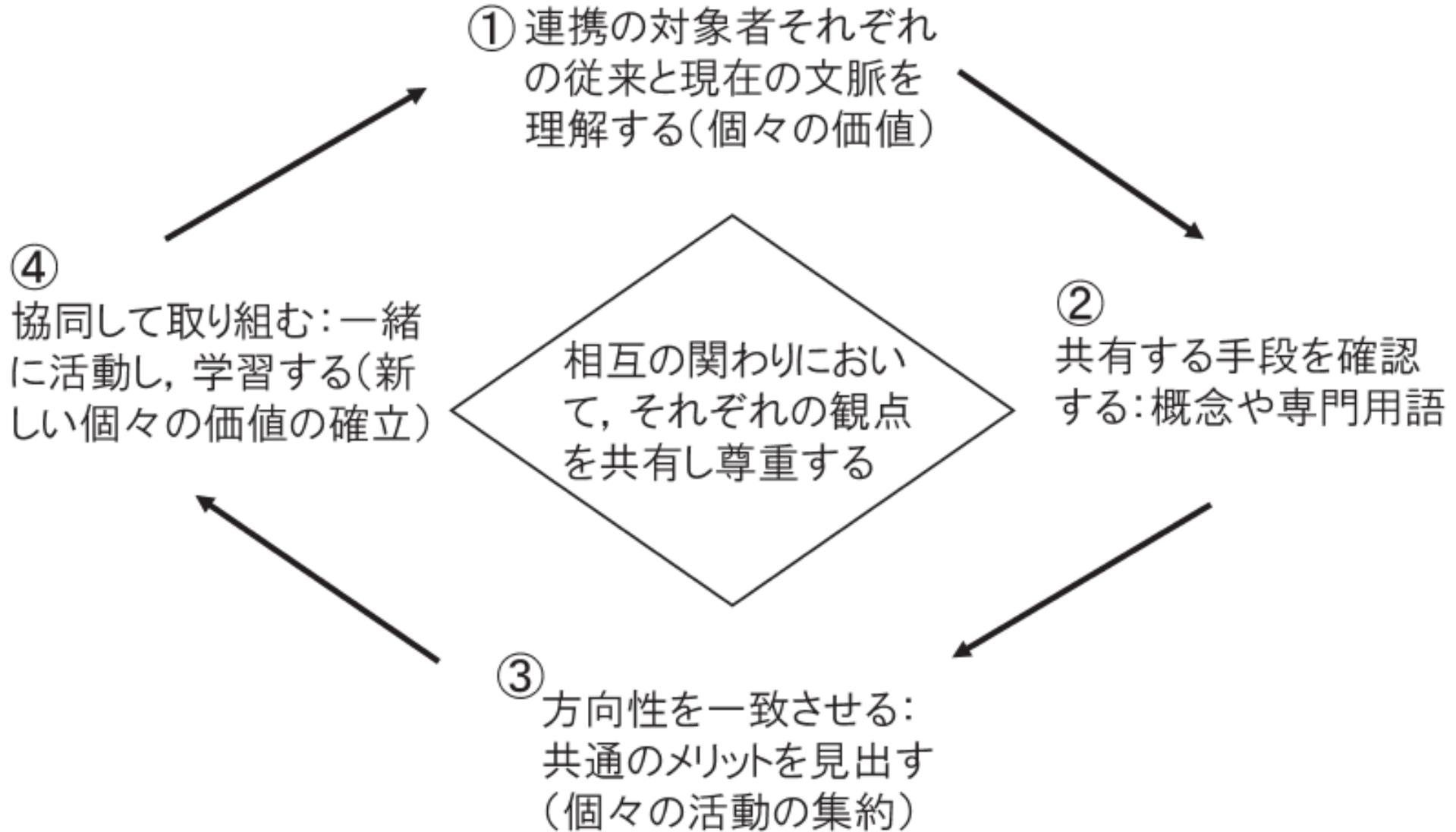
3.2 直接的なアプローチ: 科目開発

間接的なアプローチ: 教員の教育・研究活動を支援する



第3図 Blackらによる「図書館員と教員の連携モデル」
出典: Blackほか(2001)³⁷⁾, p. 218

3.2 直接的なアプローチ:カリキュラム開発

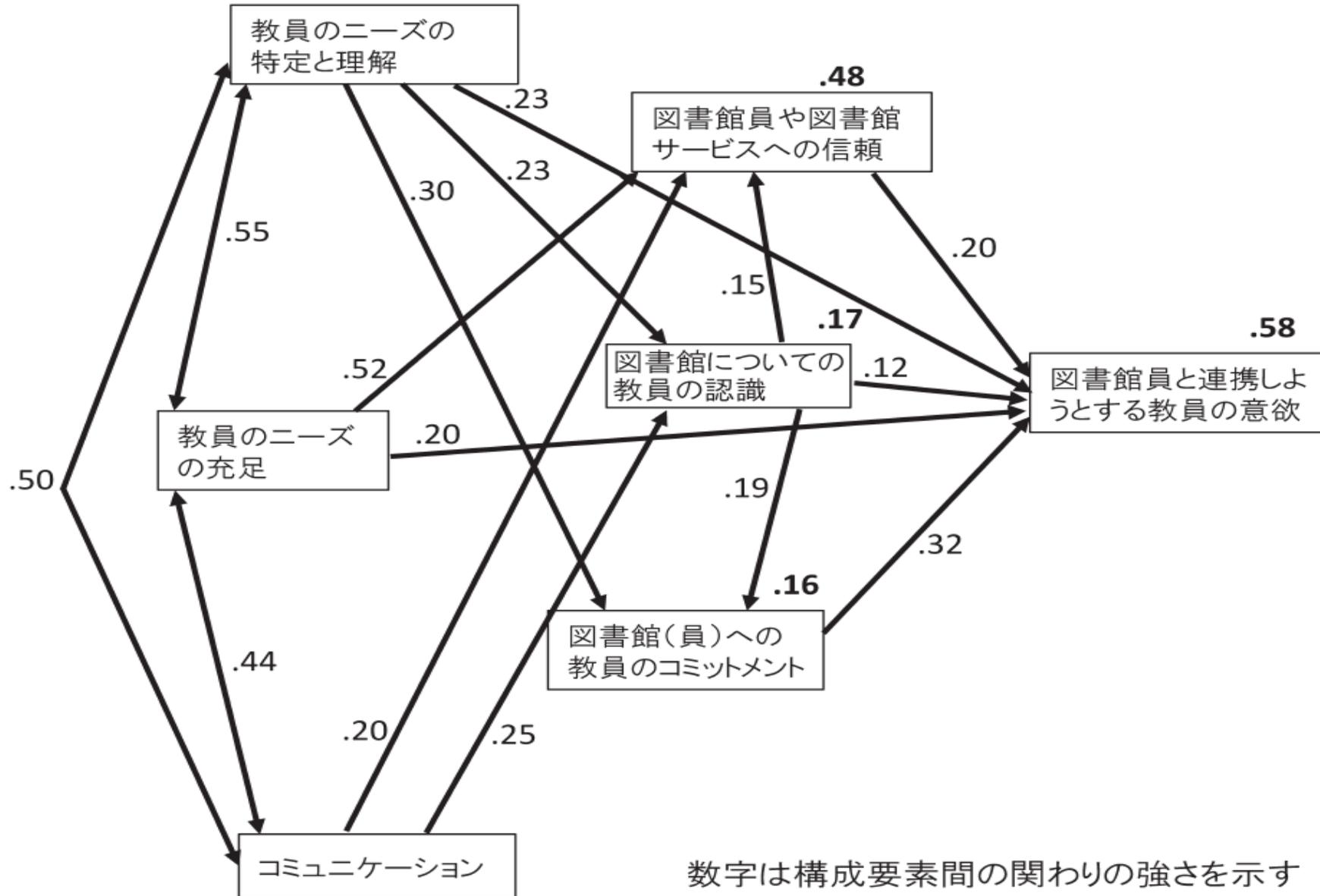


第4図 Machin による「連携のための象徴的相互作用論の枠組み」

出典: Machin ほか (2009)⁴³⁾, p. 148

(長澤, 2017)

3.2 間接的なアプローチ: 教員の図書館観を理解する



第6図 Amante らによる「図書館(員)と教員の関係モデル」(修正版)

出典: Amante ほか (2012)⁴⁶⁾, p. 98

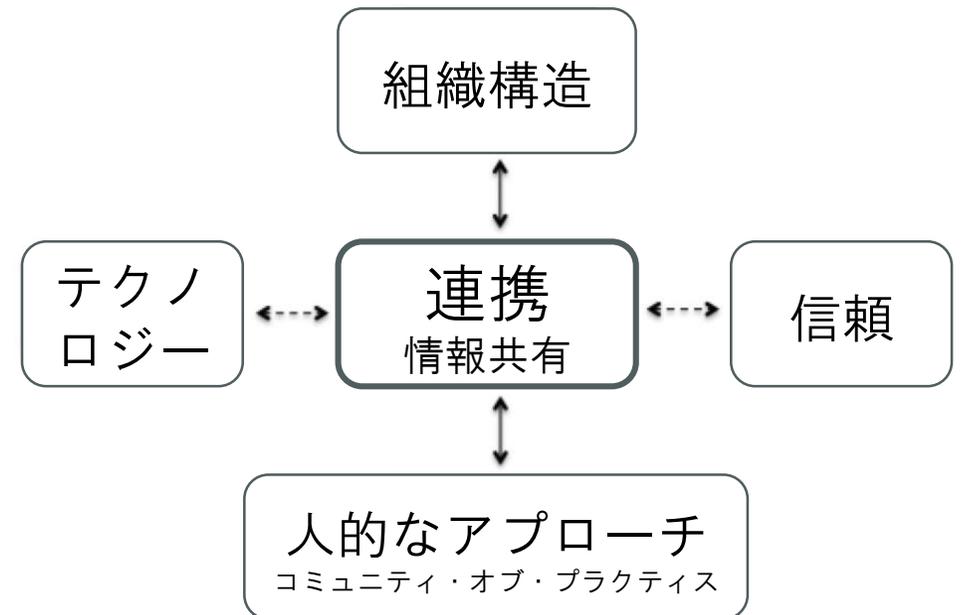
(長澤, 2017)

3.3 教育開発のための教員と図書館員の連携②

教員と図書館員の連携に介在する条件：図書館，大学，社会の条件

図書館員による教員と自身のポジショニング
教員と図書館員のパワーバランス
組織的な支援体制 & 人的なアプローチ + テクノロジー & 信頼

- 図書館員によるアプローチは組織的な条件を変えることができる
- 人的なアプローチは組織上の阻害する条件を修正するだけでなく，組織の体制を変更することにもつながる
- 組織上の体制よりも，積極的な(proactive)人的アプローチの方が重要になる



(Julien & Given, 2003; Julien & Pecoskie, 2009; Pham & Williamson, 2018; Hardy & Corral, 2007)

3.3 介在する条件：図書館，大学，社会の条件

第2表 大学規模で情報リテラシーのプログラムを新規にデザインしたり導入したりするのに影響を与える公式・非公式の内的・外的要因

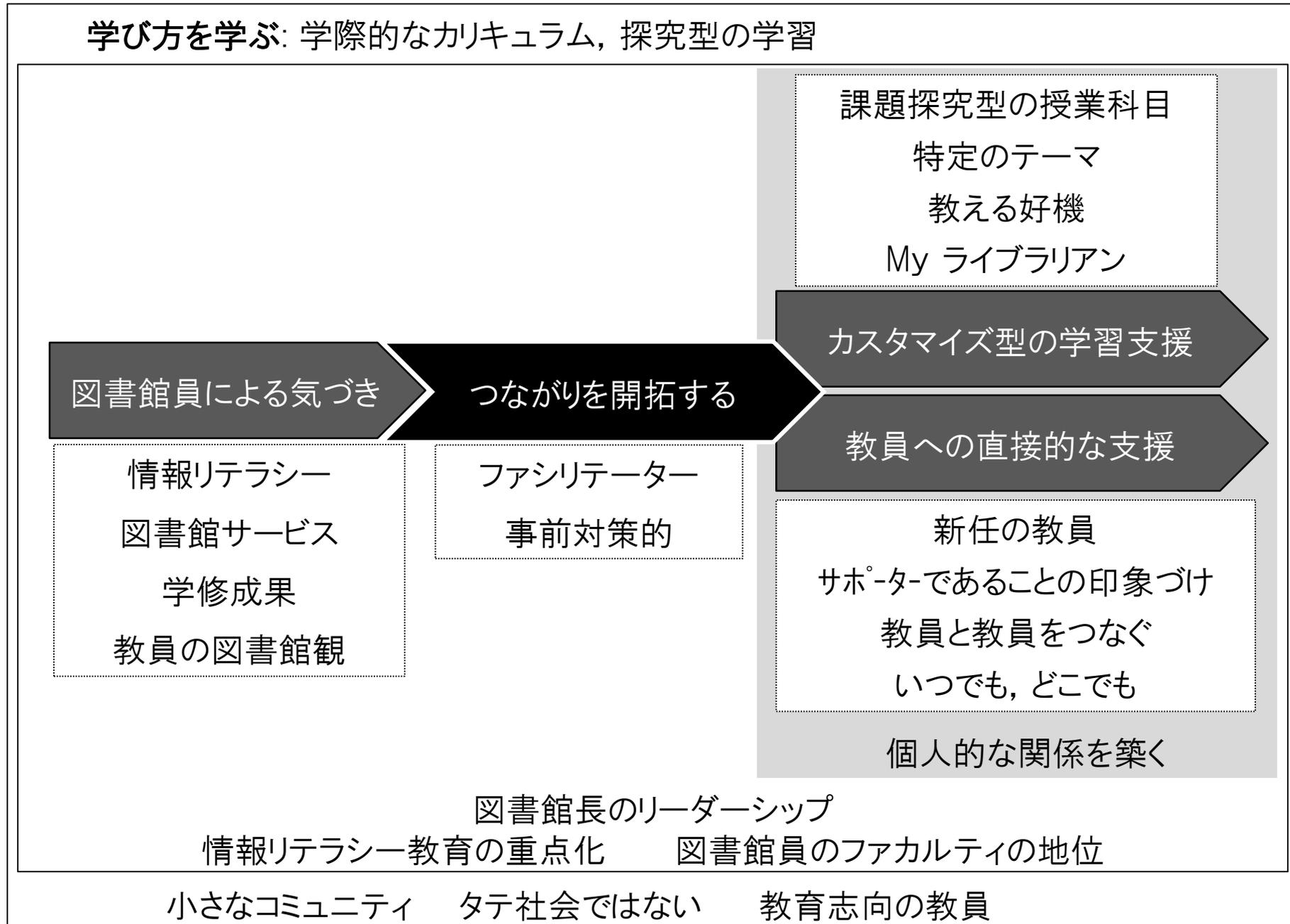
	内的	外的
公式	大学運営の仕組み 図書館員のファカルティの地位 大学の達成目標 図書館の達成目標 図書館長のコミットメント 予算	米国大学・研究図書館協会（ACRL）のガイドライン 情報リテラシーの基準 情報リテラシーのベスト・プラクティスのガイドライン 認証評価機関 州による決定事項 情報リテラシーを習得した人員の必要性 卒業生のための就職の機会
非公式	大学の組織文化や学内政治 図書館員のリーダーシップやマーケティングのスキル 既往の連携関係 （教育）開発のための連携 図書館が持つ大学観 図書館員の自己像	学内関係者の図書館（員）観 図書館や情報リテラシーに対する卒業生の認識



国内外の事例にみられる 教員と図書館員の連携

- アーラム・カレッジ(米国・教養カレッジ)
- ミシガン大学(米国・研究大学)
- タンペレ大学(フィンランド・研究大学)
- 名古屋大学(日本・研究大学)

4.1 アーラム・カレッジのアプローチと条件: 科目開発



(長澤, 2007,
2012a, 2012b,
2015, 2016b)

4.1 アーラム・カレッジのアプローチと条件①

教育開発のための戦略的アプローチ

教員の情報行動・図書館観を理解する
教員の教育活動・研究活動を支援する

教員と個人的な関係を築く

図書館の組織や人員を再編・強化する

連携に影響を与える図書館/大学/社会の
条件

科目開発

課題探究型課題への重点的な支援

各授業科目へのカスタマイズ

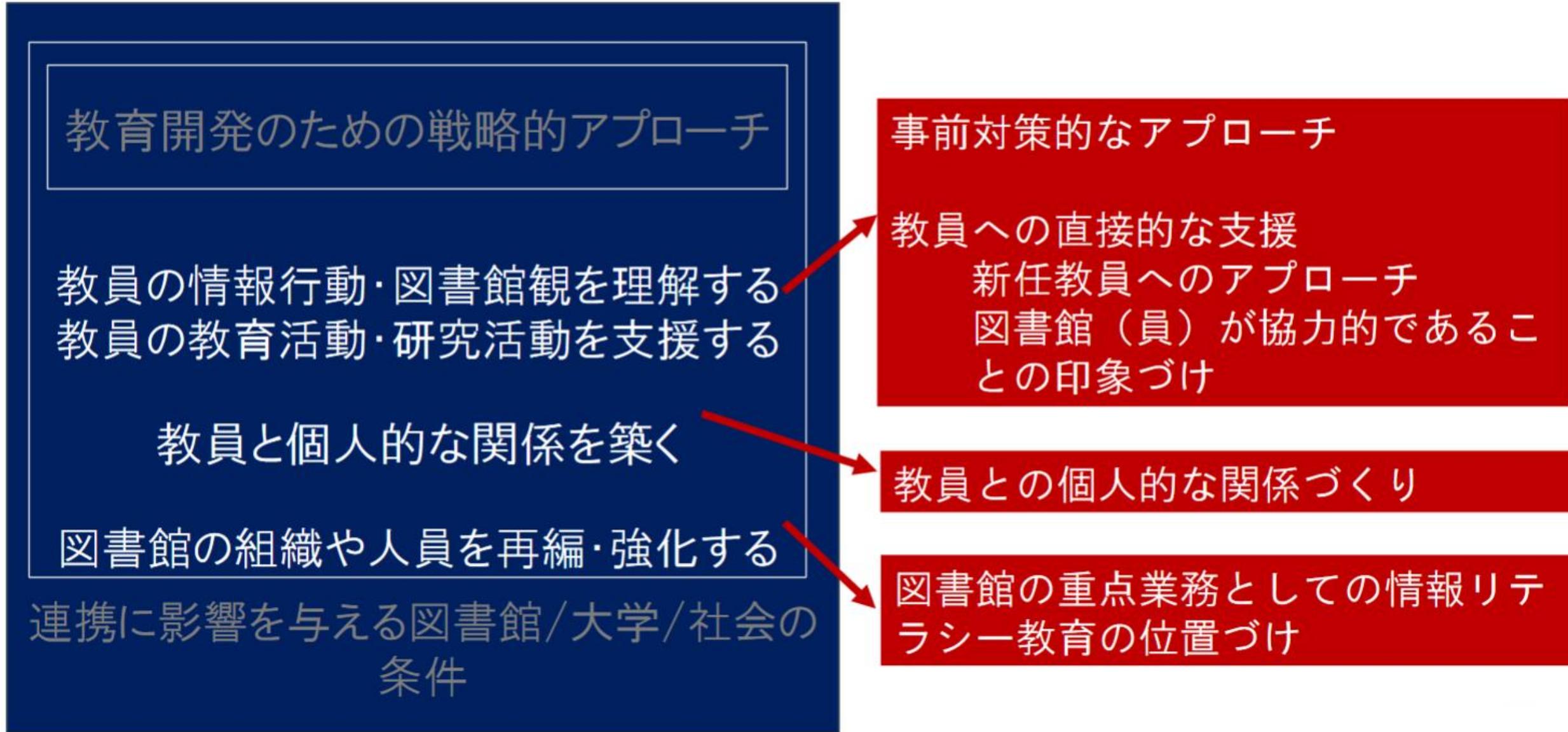
課題のテーマを反映した内容

教える好機に実施日を設定

Myライブラリアンによる対応

ファシリテーターとしての図書館員

4.1 アーラム・カレッジのアプローチと条件②



4.1 アーラム・カレッジのアプローチと条件③

教育開発のための戦略的アプローチ

教員の情報行動・図書館観を理解する
教員の教育活動・研究活動を支援する

教員と個人的な関係を築く

図書館の組織や人員を再編・強化する

連携に影響を与える図書館/大学/社会の
条件

図書館管理職のリーダーシップ
図書館専門職としての経験
長い在職期間

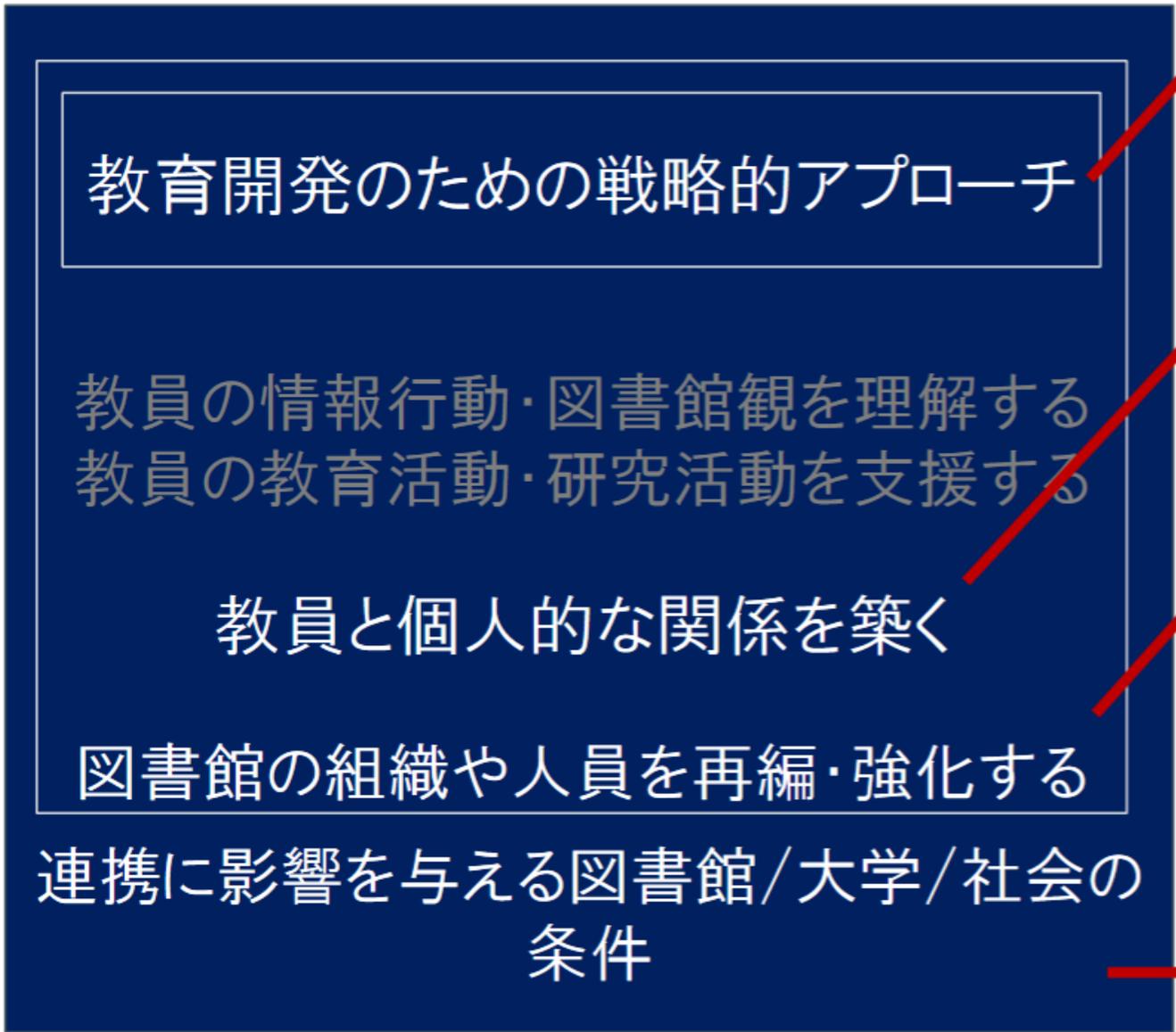
図書館員が持つファカルティの地位
ファカルティミーティングの構成員
全学委員会の委員

小さなコミュニティ

タテ社会ではない

教育志向の教員

4.2 ミシガン大学のアプローチと条件



利用者が活動する場におけるサービスの提供
研究科内のサービス拠点

研究科の一員としての活動
日常的な交流からニーズの把握
研究科と図書館の仲介役

図書館員の資質
学問分野の知識
高度なテクノロジーのスキル
社交的なパーソナリティ

図書館管理職のリーダーシップ
伝統にとらわれない企画立案
文献調査
執行部との予算交渉大学の裁量

大学の裁量経費による予算措置

(長澤, 2013)

4.3 タンペレ大学のアプローチと条件①

教育開発のための戦略的アプローチ

教員の情報行動・図書館観を理解する
教員の教育活動・研究活動を支援する

教員と個人的な関係を築く

図書館の組織や人員を再編・強化する

連携に影響を与える図書館/大学/社会の
条件

カリキュラム開発

新カリキュラムと情報リテラシー教育の統合

大学のポリシーへの組み入れ
情報リテラシー教育の必須化
各研究科への段階的アプローチ

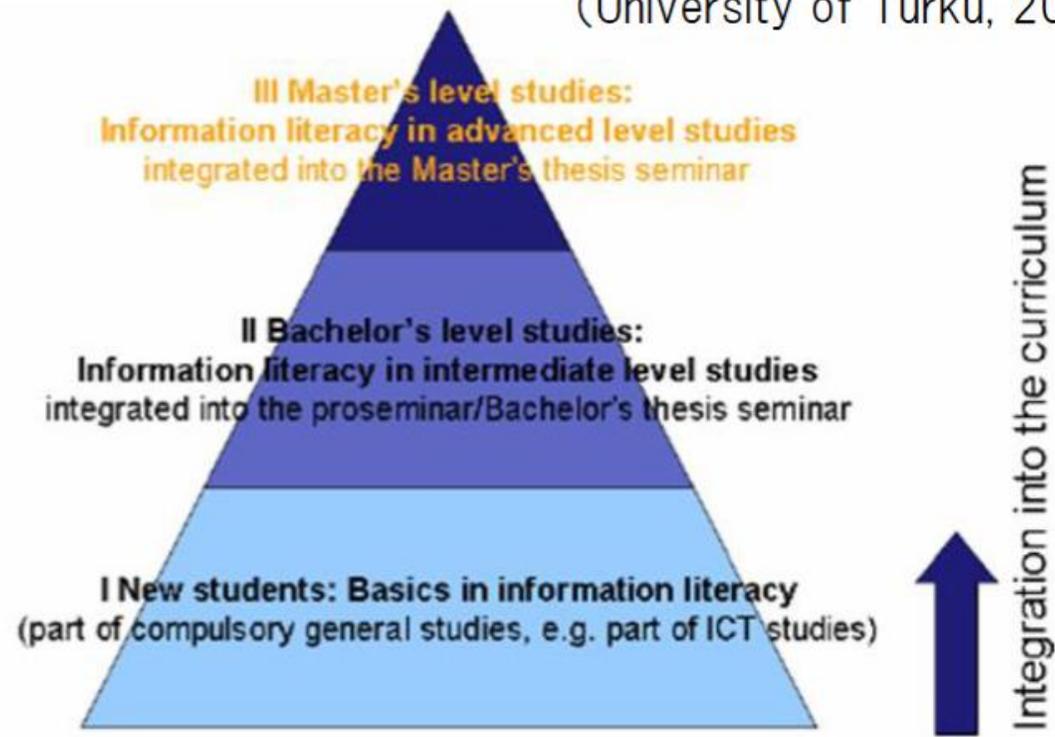
人的な支援体制の強化

図書館員の増員
情報リテラシーコーディネーターの配備
大学主催の教育方法論の受講
週2時間の自主的な資質開発

4.3 フィンランドの大学における 情報リテラシーのモデル → (2004年に提唱, 2012年に改訂)

タンペレ大学の 段階的アプローチ ↓

Deepening IL- skills,
by using them actively as a tool for
academic studies



I	目標共有のための オリエンテーション (strategic seminar)	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学改革に関する全学のセミナー ● 情報リテラシーを含む図書館サービスの案内 ● 教員によるベスト・プラクティスの共有
II	共通理解のための 基本的な情報提供	<ul style="list-style-type: none"> ● 各部局のカリキュラム委員会 ● 図書館員による情報リテラシー教育の改革案の共有
III	共有タスクを実現する ための分野情報の特定	<ul style="list-style-type: none"> ● 各部局のカリキュラムワーキンググループ ● 分野に特化した情報資源の特定

4.4 名古屋大学のアプローチと条件

教育開発のための戦略的アプローチ

教員の情報行動・図書館観を理解する
教員の教育活動・研究活動を支援する

教員と個人的な関係を築く

図書館の組織や人員を再編・強化する

連携に影響を与える図書館/大学/社会の
条件

直接的なアプローチ

支援対象へのカスタマイズ

試行にもとづく内容・方法の検討

教える好機における実施

実習による理解の定着

教員による学生への動機づけ
セッション時/事後

事後の情報共有

教員からのフィードバック
教員へのフィードバック

4.4 名古屋大学のアプローチと条件

間接的なアプローチ

日常業務における情報収集

部局や教員のニーズの把握

教員へのインタビュー

教員との雑談や個別の質問

部局の教育目標の確認

図書館関連の会議における印象づけ

図書館外の部局における説明

教員への声かけとアピール

教員による他の教員の紹介

情報リテラシーWG+PT

情報リテラシー基準の策定

教育開発のための戦略的アプローチ

教員の情報行動・図書館観を理解する
教員の教育活動・研究活動を支援する

教員と個人的な関係を築く

図書館の組織や人員を再編・強化する

連携に影響を与える図書館/大学/社会の
条件

4.4 名古屋大学のアプローチと条件

教育開発のための戦略的アプローチ

教員の情報行動・図書館観を理解する
教員の教育活動・研究活動を支援する

教員と個人的な関係を築く

図書館の組織や人員を再編・強化する

連携に影響を与える図書館/大学/社会の
条件

介在する条件

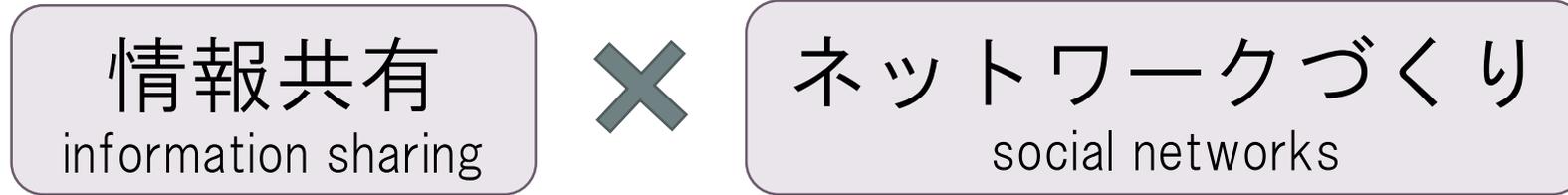
部局の一員（エンベディッド）

図書館管理職のリーダーシップ

カリキュラムの改訂

他部局による支援・協力

5. 「教員と連携する」ために図書館員に求められること



① 大学教育改革の動向について学内外の情報を収集する

情報リテラシー教育の担当者が全学及び部局の教務委員会に陪席／議事を確認
中央教育審議会の動向の確認 他大学の取り組みの調査
→担当者を決めて情報を収集し，他の図書館関係者と共有する

② 各大学で開催される教育関係の研修（FD）などに図書館員も参加する

授業設計の知識や方法，大学教育改革についての理解を深める
研修に参加している教員の意見を聞く機会にも／関係づくりにも

③ ひとりひとりの図書館関係者が，それぞれの立場でリーダーシップを発揮しながら大学内の関係者との接点を見つけ，時間をかけて丁寧に関係を構築することによって，大学図書館と大学との接点を増やし強化していく。

(Haythornthwaite, 2017)

謝辞

本発表で紹介した事例の調査・研究については、次の助成を受けています。

● アーラム・カレッジ: 科学研究費補助金(若手研究B)「ファカルティ・ディベロップメントの視点を取り入れた大学図書館の教育支援機能研究」(2004年度～2005年度)

● ミシガン大学: 科学研究費補助金(若手研究B)「教育活動を背景とする教員と図書館員の協力関係: ミシガン大学の事例研究をもとに」(2006年度～2007年度) / 科学研究費補助金(基盤研究C)「大学教育の質保証を視野に入れた図書館員による教員との連携構築のための戦略」(2015年度～2017年度)

● タンペレ大学: 「大学教育における教員と図書館員の連携に関する比較研究: フィンランドの事例研究」日本学術振興会・特定国派遣研究者(フィンランド・長期)(2013年度) / 科学研究費補助金(基盤研究C)「大学教育の質保証を視野に入れた図書館員による教員との連携構築のための戦略」(2015年度～2017年度)

主な参考文献① URLについては、いずれも(最終確認:2023-07-10)

- Asplund, J; Hakala, E.; Sallama, S.; Tapio, S. Integrating information literacy education into the curriculum at the University of Tampere, Finland. *Nordic Journal of Information Literacy in Higher Education*. 5 (1), 2013, p.3-10. <https://noril.uib.no/article/view/2425>
- Association of College and Research Libraries (ACRL). “Framework for Information Literacy for Higher Education.” 2015. <https://www.ala.org/acrl/standards/ilframework>
- 千葉浩之「教育先進国フィンランドの図書館に学ぶ学習支援」『大学図書館研究』No.101, 2014, p.35-43. <http://hdl.handle.net/10258/3794>
- 中央教育審議会. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて (答申). 2012.8.28. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- 中央教育審議会. 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申). 2018.11.26. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm
- 中央教育審議会. 学習者本位の大学教育の実現に向けた今後の振興方策について (審議のまとめ), 2023.2.24. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00013.html
- Eisenberg, M. B. and Berkowitz, R. E. *Information Problem Solving*. Norwood, Ablex, 1990, 156p.
- 堀友美「CA2009 教員と連携した情報リテラシー教育の実践：名古屋大学附属図書館の取り組み」『カレントアウェアネス』No.350, 2021.12.20. <https://current.ndl.go.jp/ca2009>
- 飯尾健「大学教育における情報リテラシーの能力基準に関する検討」『京都大学大学院教育学研究科紀要』No.65, 2019, p.415-427, <http://hdl.handle.net/2433/240823>

主な参考文献②

- Julien, H. & Given, L. (2003) Faculty–librarian relationships in the information literacy context. *Canadian Journal of Information and Library Science*, 27 (3), 65–87. <https://doi.org/10.29173/cais526>
- 鎌田均「CA1966 フェイクニュースと図書館の関わり：米国における動向（動向レビュー）」カレントアウェアネス, No.342, 2019.12. <https://current.ndl.go.jp/ca1966>
- 金子元久「学生本位になったが，学習本意ではない」IDE：現代の高等教育, No.625, 2020.11.
- 国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会. 高等教育のための情報リテラシー基準. 2015年版, 2015.3, 25p. <https://www.janul.jp/j/projects/sftl/sftl201503b.pdf>
- Lowe, Carrie A.; Eisenberg, Michael B. “Big6 Skills for Information Literacy,” *Theories of Information Behavior*. ASIS&T, 2005, p.63–68.
- Mackey, Thomas P. “Exploring metaliterate learning through the frames of information literacy” Julienm H. et al., eds. *The Information Literacy Framework*. 2020, p.206–219.
- 松下佳代編著『<新しい能力>は教育を変えるか：学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房, 2010, 219p.
- 松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング：大学授業を深化させるために』勁草書房. 2015, 274p.
- 三輪眞木子『情報検索のスキル：未知の問題をどう解くか』中央公論社, 2003, 214p. (中公新書, 1714)

主な参考文献③

- 溝上慎一「学修成果の可視化から見える学生像」『大学教育学会第37回大会発表要旨集録』2015, p.60-61. (公開シンポジウムの発表スライドも参照している。)
- 溝上慎一『高等学校におけるアクティブラーニング：理論編』東信堂, 2016, 128p.
- 長澤多代「アーラム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に関するケース・スタディ」『Library and Information Science』No.57, 2007, p.33-50.
- 長澤多代「大学教育における教員と図書館員の連携を促す図書館員によるつながり方の開拓：アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに」『日本図書館情報学会誌』No.189, 2012a, p.18-34.
- 長澤多代「大学教育における教員と図書館員の連携を促すカスタマイズ型の学習支援：アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに」『日本図書館情報学会誌』No.192, 2012b, p.185-201.
- 長澤多代「ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ：フィールド・ライブラリアンの活動を中心に」『Library and Information Science』No.70, 2013, p.177-217.
- 長澤多代「大学教育における教員と図書館員の連携を促す教員に対する直接的な支援：アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに」『図書館界』Vol.67, No.4, 2015, p.228-243.
- 野末俊比古「情報リテラシー教育をめぐる理論」日本図書館協会図書館利用教育委員会編, 日本図書館協会, 2010, p.13-24.
- 土持ゲーリー法一“能動的学修を促すファカルティ・ディベロップメント,”アルカディア学報, No.499, 2012.
<https://shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0499.html>